
青春時代

つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春時代

【Nコード】

N7316B

【作者名】

つばさ

【あらすじ】

「私、付き合ってる人がいたの。さっきフラれたって話したでしょ？それでね、フラれた理由、彼の友達なの。彼と喧嘩したから、彼の友達が俺の家に来てるからお前も来て二人できちんと話し合ってたって言われて

夏の終わり（前書き）

高校生になった俺達の青春物語

夏の終わり

高校1年の夏、俺達は出会った

俺は公立の高校に通う、何処にでもいるような高校生、大友翼。

そして俺の通う高校の目の前には名門女子高がある。

そこに通う、この話のヒロインとでも言うておこう、中島かな。

あの夏が来るまで、名前も顔も知らなかった。

すくなくとも俺は……。

この日、俺は幼なじみの富山亮に招待されて、小田桐遥と阿部祐樹と富山の別荘に行っていた。富山の別荘の前には海がある。

俺達は、何もすることがなくただ何となく海に入って行った。

始めはあまり乗り気じゃなかったものの、いつのまにか楽しくなっていた。

気がつくと、辺りは暗くなっていた。

それに気付いた俺達はすぐに帰り自宅をして富山の別荘に戻った。

別荘には食事が並んでいた。

その食事をありがたく食べ終わると部屋に戻って行った。

「それにしても、今日来てた女の子達可愛かったな」

「ばあか。誰も小田桐なんか見に来てねえっつーの」

「なんだよそれ!!」

阿部なあ、彼女がいるからって!!

言い過ぎだろ!

本当羨ましいよ

な、翼!

「別に・・・っていうか女なんていた?」

「お前!!」

いくらなんでも重傷だな!

「本当!お前勿体ないよな」

その容姿で彼女つくらねえなんて」「そうそう、僕なんて別荘はあつても彼女なんて・・・」

時刻を見るともう10時近い。

「俺、寝るから」

「なんだよ翼!!」

それで本当に高校生かよ!!」

小田桐の言葉を見殺して布団に入った。

時刻は12時

まだあいつら騒いでんのかよ

「……うつせー」

眠い目をこすりながら胸元に手を置いた。

……あれ？

「……やっべー!!」

いつもしているペンダントがない。

急いで懐中電灯を片手に探しに行った。

「おい！！翼、何処に行くんだよ！！」

遠くの方から聞こえる小田桐の言葉を無視して、浜辺に行くと辺りはすっかり暗くなっていた。

そんな中、ぽつんと人影が見えた。

近寄ってみると、そこには女が一人いた。

思わず俺は

「美嘉！！」と叫んでしまった。

女はびっくりしたようにこっちを見た。

「美嘉！！美嘉なのか？」

きつく肩を抱いた。

女は、戸惑いながら口を開いた。

「・・・私は美嘉じゃないです・・・。たぶん、勘違いだと・・・思います。」

その言葉を聞いて、翼は

「そつだな。ここにいるはずないよな・・・。」

と、小さく呟いた。
少しの間沈黙が続く……

「ごめん。悪かったな。びっくりさせて。
最初に沈黙を破ったのは翼だった。」

「ううん、全然気にしてないから。」

女は笑顔で答えた。

翼には、その笑顔が美嘉とにいてとても苦しかった。

「そうだ！
ひょっとして……これあなたの？」

女はポケットから何かを取り出した。

ペンダントだ！！！！

「すまない。それを探しに来てたんだ。
サンキュ」

俺は受けとると、さっさと帰ろうと立った。

足速に立ち去ろうと歩き始めたその時、

「待って!!」

女が声をかけてきた。

俺は少し緊張しながらぐるりと方向を変えて止まる。

「名前は？」

私、かな。中島かな」なんだそんなことか。

少しホツとした

「俺は大友翼。よろしく」

それだけ言つと、

また俺は別荘の方へと、こんどはゆっくりと歩き出した。

別荘に戻ってもまだ他の3人はザワザワしていた。

しかしその時の声は

俺をゆっくりと夢の世界へと連れて行ってくれる、子守歌のようだった。

俺は久しぶりに美嘉の夢を見た。

小学2年のころから、中学のころ・・・

とても幸せな夢だった。

次の日、俺らはまた海へと出掛けた。

するとそこには昨日の・・・確か、かな。かながいた。

かなはオレンジの水着がとてもよく似合っていて、昨日のかなとはまた違った明るい感じだった。

かなと目が会うと、かなは友達に一言、声をかけてから俺の方へと近寄ってきた。

「翼!!」

「よう」「富山達はさも不思議そうに顔を見合わせた。

「小田桐、信じられるか？俺の彼女とも全く話さないあいつが、女の子と喋ってやがる。」

小田桐と富山は信じられないとでも言っつかのよじた、口をあんどぐりさせている。

「昨日は、本当にありがとな。」

「うん。それって、大切なものなの？」

「ああ。」

かなは昨日ここで何してたんだ？」俺が聞くと、少し悲しそうに笑いながら

「失恋しちゃったの。」

と言ってから、

「ほかに好きな人が出来たみたい」

と付け加えた。

「よくわかんないけど、元気出せよ。」

「うんっ！ありがと〜」

そうだ！良かったらメアドとケー番教えて？」

「ああ、いいよ。」

「よかった。ありがとう。」

そういうと俺の携帯と自分の携帯を操作しだした。
1分も経たないうちに、

「出来た〜！」

これ、うちのメアドとケー番だから。」

と言ってメモリを見せてくれた。

「いつでもメールしてね。」

「ああ、ありがとな」

と笑いかけた。

彼女もまた笑いかけてきた。

そして、

「それじゃあ、またね」

とだけ言い残し、友達の元へ戻って行った。

俺達が話終わると富山が一目散に寄ってきた。

「あの子、昨日の子じゃん。どうしたんだよ？」

「会った。」

「会った。・・・ってそれだけ？」

興奮しながら小田桐が聞いてきた。

俺は苦笑しながら

「それだけだよ。」

と答えた

「何笑ってんだよ！！」

「お前らそんなに俺が女子と話すのが珍しいか？」

「だってお前、俺の彼女とも全然話さねえじゃん」

「まあな。」

「「「なんだよそれ」「」」

俺は3人を無視して海に入った。

そんな俺にもう何を聞いても無駄だと理解したようだった3人も海へと入って来た。

今日も暗くなり、ご飯を食べたら部屋には戻らず、なんとなく浜辺に向かってみた。

。

そこには誰もいなかったが、なんとなくかながいるような気がした。

ブー、ブー

携帯だ。

.. かな

.. 今から浜辺に来れる? ..

.. 翼

もう来てる（笑）

ブー、ブー

.. かな

りよおかいつ！

顔だけじゃなく、行動とか声まで美嘉にそっくりだ。

少しすると、

「おまたせ！待った？」とかなが走って来た。

「全然平気だよ」

「ならいいけど」

俺もかなも笑った。

俺達はくだらない世間話で盛り上がっていた。

そんな中、かなの携帯が鳴った。

）
）

かなは画面を見ると、少し曇った表情をして

「ちよつとごめんね」

と言い残し、少し離れたところへ行つた。

電話を切り終わってもまだ戻ってこないかなが心配になって近寄つてみた。

かなは泣いていた。訳も分からない俺は、ただ隣に腰を降ろした。

少し経つてから、かなは消えそうな声でぽつりぽつりと、話し出した。

「私、付き合ってる人がいたの。」

さっきフラれたって話したでしょ？

それでね、フラれた理由、彼の友達なの。

この間、彼と喧嘩したの。

彼の友達が俺の家に皆来てるからお前も来て二人できちんと話しろって言われて、仲直りするいい機会だと思つて行つたの。

それなのに

行ったら彼はいなくて、その友達に

・・・犯されたの。

信用してた。

彼の親友だから。

でも・・・。

それで彼は浮気されたって勘違いして、そのまま・・・。
このこと男の人の家にいくものじゃないよね。」

そう言ってかなは悲しそうにもう一度微笑んだ。

俺はかける言葉が見つからなかった。

それを見兼ねたかのように、かなは俺に

「ごめんなんか暗くなっちゃったね」

かなは悲しさを隠すために、わざと明るくふるまった。

そんなかなを、俺は優しく抱きしめた。

そんなつもりはなかったのに

いつのまにか

体が動いていた

かなは緊張しているようだった。

俺は

かなの高鳴る心臓の音を

静かに聞いていた……。無理すんなよ

泣くのがカツコ悪いとか思うなよ

泣きたいときは泣けよ

俺が支えてやるよ」

そう言って、またキツく抱きしめた。

好きな訳じゃない。

たぶん

美嘉に似ていたから。

「
」
ありがとう

そう言って、かなは子どものように泣いた。

どれくらい経ったんだろう。

辺りはすっかり暗くなら、かなは寝てしまった。

「
」
ったく・・・どこに連れていけばいいんだ？

などと独り言を呟いていると、

）
）

かなの携帯が鳴った。

画面には“秀樹”と書かれている。

たぶんかなの彼氏だろう。

そう思い、出なかった。

俺はかなの帰るところが何処なのかわからず、携帯を借りて電話をした。

画面には、美砂と出ている。

）
）

「もしもし！かな？

何処にいるの？」

少し慌てたような声だった。「かな寝ちゃって、何処に連れていけばいいか分からなかったから電話したんだけど」

「そうなんですか！

何処にいますか？」

「海なんだけど」

「わかりました!!」

「そこで待っていてください」

プー、プー

と言ってきた。

少し経つと、美砂と書かれていた女はきた。

「すみません!!」

俺をみるなりそう言った。

「嫌、気にしてない。」と俺は続けた。

「ありがとうございます。」

美砂という女は俺に礼をすると、かなを連れて戻って行った。

俺はそれを見送ると、富山の別荘へと戻った。

「翼、今日も彼女のどこか？羨ましいな！おいっ！」

「いいじゃねーか小田桐！俺に彼女がいるんだ。
翼に彼女がないほうがおかしいぜ」

「彼女じゃねー！！！」

「違うのかよっ！」

「ただのダチだよ」

「「「まぢかよっ」「」「富山、いたの？」「」」

「さっきからいたよ！」

俺達3人は笑った。

その夜俺はずっとかなの事を考えていた。

次の日

「今日でもうお別れだと思つと寂しいな」

「だな」

「翼もせつかくかわいい子に会つたのにな」

「別に」

「なんだよ寂しくねーの？」

「別に」

「なんだよそれ」

「よし！」

それじゃあ出発するよ！車に乗つて！」

「おう」

車に乗ろうとしたそのとき

「待つて！！！」

びっくりして声の方を見るとそこにはかながいた。

「かな！」

俺もかなに駆け寄った

「どうしたんだ？」

「もう会えないかもって思ったら・・・。
本当にありがとね！」

「いや、俺のほうこそ、ありがとな。」

「うん。」

「それじゃあ、また。」

「また。」

かなは、俺達の乗った車をいつまでも眺めていた。
見えなくなっても、まだ。

こうして俺達の夏は終わりをつけた

。

***再会* (前書き)**

今日は始業式。学校はいつもより短い。だから今日は小田桐と富山と阿部の4人で遊ぶことにした。

再会

夏休みも終わり、普通の学校生活が始まった。

電車を乗り継いで駅に行きそこからバスを使って行く。

今日は始業式。

学校はいつもより短い。

だから今日は小田桐と富山と阿部の4人で遊ぶことにした。

午前中だけだった為、昼は何も食べていなかった俺達はコンビニに寄った。

まさかこんな所でまた出会うとは思ってもみなかった

俺は商品を決めるとレジに並んだ。

「いらっしゃいます」

・・・ん？
・・・ん？

・・・あー！！！！！！！！！！

かなじゃん！！

「かな！？」

「え？

つて翼！！！！

まじ？うっそー！！」

「なんだ？騒がしい！」

「あつ、店長！すみません！」

「全く！」

店長がいなくなったあと、二人共コソコソと笑った。

他の3人は別の所に行ってると言い、どこかに行ってしまった。かなが休憩するまで雑誌を立ち読みしていた。

しばらくすると

「ども、お待たせ」

かながやってきた。

「お疲れさん！

店長怖いな」

「それが、実際あんまり役に立たないんだな」

「なんだ、見た目だけなんだ」

等とくだらない会話をしていた。

すると目の前に男が歩み寄って来た。

俺達はそれに気付き男の方をみた。

そのとたん、かなは俺の腕を必死に掴んだ。

その行動に気付いた俺は男の行動に瞬きもせず注意した。

「よう。かな、次はコイツと浮気してんのか？
いい身分だなあ、おい。」

男はそう言ってかなの髪を引っ張った。

「・・・痛い！・・・やめてよ！」

かなのその言葉と同時に俺は

「やめろよ！！！」

と大きな声を出してかなと男を離れた。

「お前には関係ねえ！！！」

男は声も荒げた。

俺達は取っ組み合う形になった。

「二人ともやめて！！！」

隣ではかながヒステリックに悲鳴のような声をあげている。

回りには野次馬がたくさん集まっている。

くくく

パトカーが来たみたいだ。

それに気付いた男は

「ちっ」

舌打ちをして、いそいで走っていった。

「大丈夫か？かな。」

「うん……。」

「警察がくるから、早く行こう。」

「うん……。」

俺達はその場からいそいで走った。

ずいぶんと長いこと走った。

「そろそろ平気かな。」

俺は独り言を呟いてかなを見た。

その時のかなは、凄く悲しそうで、凄く怯えていて、そして……

俺が今まで見た中で一番綺麗だった。

たぶん、悲しいのは信じてもらえなかったから。

怯えていたのは暴力を奮われたから。

きっと、今までは無かったんだろう……

「もう、いごつか。
戻ろっ。」

「ごめん。先戻っていいよ。」

「なんで泣いてるの?」

「泣いてね・・・」

「泣いてんじゃないん!何で泣いてるの?」

かなが俺の言葉をさえぎった。

「かなが泣かないからかわりに泣いてんの。」

「よしよし。」

かなは俺の隣に座りなおすと俺の頭を撫でた。

「私が泣かなかったのは他に好きな人が出来たから。
っていうか、始めからいたんだけどね。」

それで喧嘩したの。

私がいけないの。

だから、こうなっても仕方ないの。」

何かを振り切ったかのように、まるで・・・自分に言い聞かせるよ

うに言った。

そんなかながとても切なくて、とても可愛く思えた。

「で、それって誰なわけ？上手くいつてんの？」

「友達としてなら、上手くいつてるよ。」

「なんだよソレ。」

「あははー。まあね」

「頑張れよ。」

「うん。」

そついう翼はいるの？」

「ああ、まあな。」

「ふーん。」

「よし、そろそろ帰るか。家まで送るよ。」

俺はその話題から逃げるかのように言った。

「そうだね。」

「ありがとう。」

「ここでもいいよ！」

「ありがとうっ！」

「大丈夫か？」

「うん！」

「すぐそこだから。」

「そっか。じゃあ、また。」

「うん、またね。気をつけて。」

「おうっ！ありがとう。」

そう言っていると俺は自分の家の方へむかった。

このとき、まだ俺はこの先どんなことが起こるかなんて、

知る訳もなかった。

過去（前書き）

もしもあの時、もしも・・・もしも・・・俺がこんな事をしなかつたら助かったのかな・・・

過去

俺はあの日から毎年来ている。

そして今日も。

愛しい、愛しい、美嘉。

「毎年毎年、お若いのお疲れ様です」

「いいえ、こちらこそ、いつもありがとうございます。」

「雨が降ってますから、お気をつけて下さい。」

「はい。山田さんも気をつけてください。」

それでは。」

「ええ、またいらして下さい。」

あの日もこんな雨だったっけ・・・俺は傘をさしながら、昔のことに更けていた。

ザー、ザー

「雨、凄いな。何か帰る気無くすよ。」

「まじですごいな。
美嘉大丈夫か？
家まで送るよ。」

「まじ？ありがとサン」

俺達は急いで電車にのった。
滑り込みセーフだった。

「間に合った〜
よかったね」

「おう、よかった。」

しばらくして俺達は目的の駅に着いた。
俺より先に美嘉は降りた。

もし・・・

もしもあの時俺が無理にあの電車に乗せず、一本後の電車に乗って
いたら・・・

電車から降りるとき、俺が先だったら・・・
美嘉も、俺の気持ちもあんな風にならなかつただろう・・・

） 駅、 駅）

ガシャン

美嘉は俺よりも先に電車を降りた。

向かい側に黒い服を来た男がいる。美嘉とすれ違い様に、そいつは・
・

美嘉を、

美嘉を刺した。

男は走って逃げる。

俺は・・・ただ状況を理解できず、ただ・・・
ただ、呆然と上から美嘉を見下ろしているだけだった。

俺は回りの

「救急車!!!」

救急車!!!誰か!!!」

と言う声で我に帰った。

「美嘉!!!!!!」

美嘉!!!!!!」

美嘉!!!!!!」

美嘉ああ!!!!!!」

俺は必死で美嘉の手をとり、美嘉の名前を呼んだ。

救急車の音がドンドン近付いて来る。

「すみません、道を開けてください！
状況は分かりますか？」

俺に話しかけて来た。

「電車を降りたら、刺されて・・・それで、走って逃げて行きました。」

俺はそれだけ言うと救急車に乗り、美嘉の手をずっとにぎっていた。
心から助かることを望んで。

「つ・・・ばさ・・・」

「なに？どうした？」

「ず・・・つと・・・ず・・・つと・・・好き・・・だよ・・・わすれ・・・
ない・・・でね・・・？」

「何言ってるんだよ！！！！俺も好きだよ！
愛してる、忘れないでなんて、まるで別れみたいな言葉言つなよ！
！！
生きる！！！！」

俺が言い終わると、美嘉は一瞬びっくりしたような顔をしたが、す

ぐにこやかになり、

ゆっくりと・・・瞳を閉じた。

「美嘉！……！」

美嘉！……！

美嘉！……！……！」

俺はどれくらい泣いていたんだろう。

どれくらい自分を責めていたんだろう。

ごめん。

美嘉、ごめん。

俺のせいだ。

そんな事を考えながら電車に乗っていた。

悪夢 (前書き)

何回・・・何回俺を苦しめるんだ。もう無くしたくない。大切なんだ。

悪夢

次の日

俺は学校に通う電車の中いた。

「・・・さ！・・・ばさ！・・・つばさっ！・・・！」
「えっ？」

あっ、かな！！」

かなは制服を来ていた。

「その制服、俺の学校の前の！！」

「えっ、あっ、うんっ。

翼の前の学校なの？

まじ？

じゃあ丁度いいじゃんっ

一緒にいこっ！！」

「おう。」

かなが来ている制服は、美嘉が・・・美嘉が行くはずだった学校の制服だ。

俺はまた苦しくなった。

美嘉がこの制服を着ていたら・・・と考えていた。
それが今実際目の前にいるようだ。

「似合ってる？」

なんて笑いながら聞くかなを抱きしめた。

「ごめん。少しの間だけこのままでいて。」

「・・・別にいいから。」

何かを決心したように口を開いた。

「美嘉を好きでいていいから。代わりだと思っていいから、だから付き合って」

「俺、そんなこと言ったら甘えるから駄目。そんなこと・・・」
「していいよ!!」
「していいからお願い!」

「私の好きな人って、翼なの。」

「本当はずっとずっと前から翼を知ってた。
私は美嘉の友達だったの。」

前から毎日翼と美嘉が幸せそうに一緒に帰るのを見てた。
あの日も、翼が美嘉の手を引いて行くのを見てたの。
美嘉は、その日もすごく幸せそうな顔してたよ。
翼も、幸せそうだった。

それなのに、夜、緊急連絡網がきて、美嘉が死んだって。

信じられなかった。私は翼がその時から好きだったけど、美嘉の彼氏だからって自分に言い聞かせて、秀樹と付き合ってたの。美嘉は大切な親友だったから。

なのに美嘉が死んじゃって、今ならひよっとしたら……って悪いこと考えて……。

それに秀樹が気付いたみたいで、それで喧嘩をしたの。

秀樹に悪いことしちゃった。

でもね、秀樹に悪いことしても、美嘉の事をまだ好きでもいいから、付き合っしてほしいの。」「……かなは……かなは本当にそんなんでいいのかよ！

もっと自分を大切にしろよ！」

「いいよー!!」

だから……だからお願い！」

「……」

わかった。」

「ありがとうっ」

駅へ、 駅へ

「翼、一緒に行こう」

「おう。」

それから俺達は毎日会うようになった。

小田桐達は

「翼ってばよ、最近連れねーよな！」

等とぼやいている。

かなとずっと一緒にいることで、美嘉ではなく、かなを見るようになってきた。

少しずつかなを好きになっていた。

いや、もう完全になを好きだった。

そんな頃に、再び悪夢はやってきた。

何回・・・

何回俺を苦しめるんだ。

お願いだから

俺の命と引き換えでいいから！

もう・・・あんな思いしたくないんだよ！

…命…(前書き)

「ありがとう。翼、大好きだよ。ずっとずっと一緒にいてね」

…命…

あれから一年。

俺は高校になって2度目の夏休みになった。

そして

変わらない俺達。

変わったのは、俺が美嘉のことを考えなくなったことだ。
今、俺は幸せだった。あんなことが無ければ…。

その日は俺達の記念日。

出会ってから1年だった。

そんな大切な日に喧嘩をした。

「悪かったって！」

昨日は本当に悪かったって！」

「もういいよ！」

昨日が何の日かわからなかったの？」

「何の日って今日が記念日だろう？」

「もういいよ」

俺は何がなんだかわからなかった。

「一体なんだってんだよっ！」

いらついた俺はそのまま寝ようと布団についた。

カサカサ

???

そういえば!!!

そういえば一ヶ月前に手紙を買ったんだ

見るのを忘れてた。

.. 8月17日はうちの誕生日だからね(笑)

よろしく

あと(大好きだよ

その手紙を読み終わると一目散にかけだし、プレゼントを買いに行った。

指輪をかった。

メッセージには

.. 俺も愛してる

誕生日おめでとう

それを書き終わるとまたもや一目散にかなの家まで走った。

ピンポン

「.....はい」

ガチャ

「誕生日おめでとう。」

遅れてごめん」

「・・・ありがとう」

ガサガサ

「・・・えっ・・・指輪・・・いいの？」

「かなの為に買ってきた。」

「ありがとう。」

翼、大好きだよ

ずっとずっと一緒にいてね」

「俺も。愛してる」

そういつて、抱きしめた。

「じゃあ・・・」

「まって。」

お茶していけば？」

「え？あつ、ありがとう」

とまどいながら中に入った。

中には飾りも無ければテレビもパソコンも無い、殺風景だった。
お茶いれるね〜

火をつけた瞬間だった。

悪夢は当然の如くやってきた。

一瞬何がおきたのか分からなかった。急いでかなを捜す。

「かなっ！かなっ！！

かなあああああ！」

「何処だよ！かなっ！」

すると消えそうな程小さい声で

「翼っ翼っ

私なら大丈夫。早く行って。」

と言った。

その声の方をみると誰だかわからないほど肌はただれ、目もあてられないほどだった。

「見ないで！！！！！！

たぶん・・・酷いから。

早く行ってよ！！！」

「嫌だ！かなが好きなんだよ。どんな姿でも、かなだから好きなんだ。だから一緒に行こう」

「・・・うん・・・

ありがとう」

なんとか俺達は一面をとりとめたものの、かなの肌は整形手術でも
どうにもならない程ひどいものだった。

それを見たかなは自殺をした。

そして俺もかなの後を追うようにして自殺をした。

いいことではないか、今の俺には生きる価値がないから。

また生まれ変わったときは必ず一緒にいような。
そして、幸せになろう。

かな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7316b/>

青春時代

2010年12月2日02時29分発行